

# 海外研修報告 ～メルボルン・ジーロング(オーストラリア)大学調査～

三重大学医学部医学系研究科  
○小川 覚  
s-ogawa@doc.medic.mie-u.ac.jp

三重大学生命科学研究支援センター動物実験施設  
石河秀樹  
三重大学工学研究科技術部  
中村昇二

## 1. はじめに

平成25年度海外事情調査(技術部門)として学長裁量経費の支援を頂き、技術職員3名でオーストラリア・ビクトリア州の理系大学を調査訪問し、研究機器の管理運営や、教育・研究支援に携わる技術職員の実情を情報交換し、また実際に研究施設の様子を見学することが出来たので、その内容について報告する。

## 2. 研修先の選定、目的

今回の研修では訪問先を選定する際に、工学・医学・生命系の技術職員で訪問することから、理系大学を念頭に置いて選定し、そこでの技術職員として関わる、研究機器の管理、教育、運営、技術職員の組織、待遇等を調査することにより、日本との違いを見出すことを本研修の目的とした。

## 3. 研修日程

日程は平成25年12月2日～7日の6日間であるが、初日は夕刻の出発だったので前後約3日を移動に要したため、滞在は3日間の中での視察であった。この時期オーストラリアは夏であるが、メルボルンは南端近くに位置しているためか、日本のような蒸し暑さは無かった。



図1. 訪問大学位置図

## 4. オーストラリアの大学事情

オーストラリアの大学は公立として39校があり、他には私立が2校のみである。日本と比べても大学の数が著しく少ない。予算としては、政府から入る資金は年間予算の数%ほどで、残りは留学生の授業料や、商業的研究を行っている大学ではその成果による収入が資金となっている。最近では政府から効率化という名目で予算が削減されてきているようで、各大学で特色を出し、大学ランキングを上げる努力を行っているということであった。

## 5. 訪問大学概要

### 1) Deakin (ディーキン) 大学 (視察訪問)

- ・ ジーロングとバーウッドにキャンパスを持つ。訪問は工学系学部のあるジーロングキャンパスへ。
- ・ 規模はオーストラリア国内 9 位 (公立全 39 校中)
- ・ 創立 1974 年
- ・ 学生数 44,000 人 (うち留学生 6,000 人)

### 2) Victoria (ビクトリア) 大学 (視察訪問)

- ・ メルボルンにキャンパスを持つ
- ・ 創立 1992 年
- ・ 学生数 19,000 人 (うち留学生 4,800 人)

### 3) Melbourne (メルボルン) 大学 (訪問は叶わず、自由視察)

- ・ メルボルンにキャンパスを持つ
- ・ 創立 1853 年
- ・ 学生数 20,000 人 (うち留学生 7,000 人)

## 6. 視察調査の内容

### 1) Deakin (ディーキン) 大学

ディーキン大学ジーロングキャンパスでは、事務監督の長であるダレン・テイラー氏と、技術部長のモニカ・ムーア氏と面談を行い、大学の概要と学部の研究分野について説明を受けた。その後、技術職員の組織形態、業務内容、配置、勤務形態、待遇、評価、研修制度などについて、聞き取り調査を行った後、学部内の各研究室を見学し、利用されている研究機器について説明を受けた。

また、技術職員の方々にも休憩時間に合わせて来ていただき、短時間ではあったが直接聞き取りすることが出来た。この大学キャンパスは工学系学部であるので、大型の実験装置もありその安全管理や、電子回路を学ぶ実習室にはカメラを設置するなどのセキュリティ対策も充実しており、管理が行き届いていることが感じられた。



図 2. ディーキン大学訪問

### 2) Victoria (ビクトリア) 大学

ビクトリア大学では、企業支援担当のリー・エドワード氏と、技術長のブラッドリー・ガット氏、国際交流担当のセユン・キム氏の 3 名と面談を行い、大学の概要、研究分野などの説明を受けたあと、技術職員に関連する質問について、聞き取り調査を行った後、研究室、実習室を見学し、機器等の説明を受けた。ここでは主な研究分野としてスポーツ医学の研究を行っているということで、各種分析を行う生化学・生理学系の研究機器のほか、低酸素室やサイクルマシンのような人間を研究する設備も整っており、プロのアスリートも研究対象になるとのことで、初めて見る装置にも新鮮さを感じた。



図3. ビクトリア大学訪問

### 3) Melbourne (メルボルン) 大学

メルボルン大学では、キャンパスの様子を自由見学し、入れる範囲で施設や設備を調査した。中でも気になったのが、研究棟と思われる玄関に、研究室・教員室をマップ表示するタッチパネル式のデジタル案内端末が設置されており、初めての訪問者にも親切な機能であった。



図4. メルボルン大学キャンパス調査

## 7. 調査を終えて

今回、海外の大学事情調査を行ったことにより、日本とは（三重大とは）また違った、オーストラリアの大学の状況、技術職員の業務や立場の一端、研究設備等の充実度の違いなどを知ることができた。また大学のキャンパスの広さや、建物の大きさなど、三重大はもとより、日本の大学に比べても規模が大きいことに驚かされた。また機器、設備などが充実しており、そこで働く技術職員も技術という専門性を持って各人の業務を行っており、士気も高いものがあると感じた。しかし、運営の効率化や、予算削減という厳しい面も、日本と同じようにあることを知り、それにもかかわらず学業の満足度や、大学のランキングが上位にあることで、その理由を考えることも必要と感じた。また言葉の壁は否応なく付き纏ったが、日本を離れて海外の文化を短期間ではあるが体験できた。この研修で得た経験を、今後に生かせるよう努力したいと思う。

## 謝辞

この海外研修において、快く訪問を受け入れていただいたディーキン大学、ビクトリア大学の各関係者の皆様に、深く感謝いたします。

私たち技術職員が、このような海外研修に行く機会を設けて頂き、また学長裁量経費として資金面でご支援いただきました、内田学長、鈴木事務局長に深く感謝いたします。また渡航、訪問に際しての準備などでいろいろとご助言頂きました、各部局事務の方々に深く感謝いたします。そして技術職員3名の所属する研究室、施設の方々には、海外研修中いろいろとご配慮を頂きましたことを、心より感謝いたします。